幾山河

第28号

平成27年5月15日
発行
公益社団法人沼津牧水会

目次

牧水と千本松原	2
千本松原の松を守る	4
松	18
岡山・広島旅行記	22
第61回 沼津牧水祭	
碑前祭・芝酒盛	25
短歌大会	26
第27回 雛の歌会	27
サロン音楽の夕べ	28
文化講座	30
平成26年度事業報告	31
定款・編集後記	32

松原のしげみゆ見れば松が枝(え)に木(こ)がくり
見えてたかき富士が嶺　　『くろ土』

この歌は、大正九年八月沼津へ移ったその年の秋の詠。「千本松原は沼津の海岸にあり、狩野川の川口より起りて西数里が間に及び、老松甚だ多し。」の詞書きを付した「千本松原」と題した二十二首中の一首。

新年号では恒例の富士に、今年はこの松原をうたった歌が正鵠(せいこく)を得ていると取り上げた。

◇

松の木十本二十本
百本千本一萬本
ぽんぽんあがるは揚花火
あがつてはじけて下り龍
龍のゐるのは富士の山
富士の山から下見れば
田子の松原三保の松
松の木十本二十本
百本千本一萬本
ぽんぽん叱つて下さるな　　牧水

牧水と千本松原

榎(えの)本(もと)　篁(むら)子(こ)
（沼津市若山牧水記念館館長）

歌人若山牧水は松が好きだった。宮崎生まれの牧水が沼津を第二の故郷と親しんだのは偏(ひとえ)に沼津の千本松原と駿河の富士に魅せられたからである。牧水の松原への愛着はその随想に、また多くの歌に残されている。

かつてその千本松原が姿を消したことがあった。時は群雄割拠の戦国時代、武田と北条の争いで松が全て伐(き)り払われ、そこへ東国行脚のためこの地を訪れた比叡山延暦寺乗運公の実弟増譽上人が潮の害に苦しんでいた人々の有様に松原を復元させねばと発心され植樹に着手。しかし浜は石ばかりでなかなか根付かず、上人は一本植える毎にお経を誦(じゅ)しつつ、千本の松を植え松原を蘇らせたのである。沼津市千本松原の「千本」の由来は斯程(かほど)に重い。

千本松原を日本一の松原と讃(たた)え朝夕を慰められていた牧水だが、大正十五年松林伐採計画を聞き「幾らかの銭の為に増譽上人以来幾百歳の歳月の結晶ともいうべきこの老樹たちを犠牲にしようというのであろうか。松原は一度伐られたら元には戻らない。これは一私人の嘆きに止(とど)まらないのである。眼前の些事(さじ)に囚(とら)われず百年の計を建ててほしい」と声をあげ、乗運寺先々代住職梹樹(ばいじゅ)上人と共に保護を訴え、結果、松原は守られ増譽上人の心を次に繋ぐことが出来た。牧水は今その千本山乗運寺に静かに眠っている。

聞きゐつつたのしくもあるか松風の今は
夢ともうつつともきこゆ　　牧水

◇

右は、平成二十二年の静岡新聞「窓辺」に寄せたものだが、狩野川河口から富士川までの駿河湾にそって続く松原の起点沼津千本松原の松伐採計画を聞いた牧水は、矢も楯もたまらず、福沢諭吉創刊の『時事新報』に松伐採反対の一文を寄せ、沼津牧水会理事長・乗運寺林茂樹住職の先々代梹樹(ばいじゅ)上人（林彦明）と共に反対に立ち上がり、演説など得手でない牧水が勇を鼓して演説をしたりの保護運動に邁進した。その結果、松原伐採は取り下げられ、四百年に及ぶ沼津の宝を守ったのである。

それから八十八年後の昨年九月、突如市の津波対策築山計画ということで樹齢二百年の松を含む松百本を伐採、十月には施工という情報がもたらされた。

驚いた林住職は、市民への説明が不十分なまま、松を伐ってまで海辺のその場所の築山

計画が妥当なのか否か、松を伐らずに進めるという他の案もあるのではないか、との説明を求め、市民も加わっての議論の応酬となり、署名運動、全国ネットのテレビ放映までの騒動となった。

その最中（さなか）の十月十九日、恒例の沼津牧水祭が千本松原「幾山河の歌碑」の前で開かれ、主催者林理事長の挨拶、栗原裕康沼津市長の祝辞、牧水遺族としての榎本の挨拶がピリピリと張り詰めた雰囲気の中でなされたのである。

折しも、源氏物語や谷崎潤一郎などの作品をスイス、ドイツ圏で出版、紹介されているスイス人の大学教授が、次は牧水を取り上げたいとのことで来日されお会いした。「ドイツには有名な黒い森があり、その森の保全に国をあげて取り組んでいる。牧水は樹木を愛し、その格別な思いを作品に取り上げ、またその保全にも力を注いでいて、特に沼津の千本松原を大切にし、その保護運動もしたと聞いているので、そのことを重点に出版したい」との趣旨であった。その偶然に驚きながら、牧水の時代とはまた違う自然界の動きそのものが全地球的におかしくなっている昨今、その環境保護の在り方は軽々に論じられない問題であることを思う。今回の津波対策という課題の大きさと自然保護の両立の難しさは重々承知しながらも尚、次世代のために皆が知恵を絞る大切さを痛感し、そして努力を惜しんではならないとの大きな宿題を与えられた今年の富士山と松原であった。

＊『創作』平成二十七年一月号から転載し、一部補正いたしました。

福澤諭吉創刊の「時事新報」（大正15年９月14日～16日）

千本松原の松を守る

～「築山」造成に伴う松の伐採に反対する運動の経緯 ～

松を伐採、浚渫土砂を利用

常盤町に計画される人工高台

千本の沼津港外港堤防陸側、中部浄化プラントと常磐町自治会館（ときわ保育所併設）に挟まれた松林に計画されている津波避難用築山。「南海トラフ地震に備え、災害時には津波避難施設として、平常時には市民の憩いの場として利用できる人工高台を整備します」—市当局による、こうした説明に疑問の声が上がっている。計画では、来年三月の完成を目指し、車道から堤防まで約一〇〇㍍ある海側約六〇㍍に、セメントを混ぜた土砂を転圧機械で締め固めて標高最大一五㍍の築山を築造するという。

土砂は田子ノ浦港から コンクリで固め築山整備

写真の中の全てのクロマツが伐採される予定

築山が造成される予定地。手前が外港の堤防

予定地は四、二〇〇平方㍍。計画では、ここに標高六・五㍍で百十人（一一〇平方㍍）、標高一五㍍に百五十人（一五〇平方㍍）、標高一三㍍の芝生広場に八十人（八〇平方㍍）、合わせて三百四十人が避難できる築山を築造。堤防上の歩道と築山を接続するため堤防下のクロマツ百本以上（樹齢約三十五年）を伐採して土砂を積み上げるほか、築山予定地のクロマツ六十本程（樹齢二十年から八十年程と見られる）も伐採が予定されている。

避難予定者は近隣の常磐町住民約百人、ときわ保育所の園児と職員、港湾関係者と釣り人ら合計三百人程を想定。建設費は約六千二百万円で、県が二分の一を補助する。

さらに県は、補助金のほか、土砂の費用と運搬費、土砂に混ぜるセメント費用を負担するというが、築山に使う土砂は、県が管理する田子ノ浦港内の浚渫（しゅんせつ）土砂が利用される。

かつて「田子ノ浦のヘドロ」として知られた浚渫土砂。有害物質の含有が心配されるが、築山担当の市危機管理課、山中史隆課長は「土砂は安全性が高いものを選んだ上で浚渫している。科学的検査でも安全性が証明されている。以前のヘドロとは全く違う」と説明。

ただ、それほど安全な土砂なら、高波に削られ続ける富士市鈴川海岸の保全のためにも使えるはず。浚渫土砂は同海岸の眼と鼻の先。それが、運搬費がかさむ、富士山の大沢崩れで発生した土砂を使っている。

築山築造のために田子ノ浦港から運ばれる土砂は約一三、〇〇〇㌧。一〇㌧ダンプカーが住宅街を何回となく往復することになる。

また、築山周辺の津波想定高は最大六・五㍍。築山の避難場所の最低標高も六・五㍍だが、堤防の歩道標高は八・二五㍍。その上に波返し五〇㌢があるが、そもそも、津波襲来時、海に向かって逃げる人がいるのかどうか。

日本の「白砂青松百選」の一つ千本松原のクロマツ伐採。予定地は一九五一年四月に風致地区に指定されたが、中部浄化プラント建設を前に六二年七月に解除。伐採は法的には問題ないが、ここには、景観と塩害防止を考えて市民が植えたクロマツが育つ。

また、戦国時代、戦乱で伐採された松原で増誉上人がお経を唱えながら一本一本、クロマツの苗を植え、若山牧水は県の松原伐採計画に反対して中止させた。

先祖が植え、守り、代々伝えられてきた松は、沼津の財産とも言えるものであり、この松たちが背後地の住宅を守ってきた。今まであった松がなくなることで、環境への少なからぬ影響も心配されている。

平成26年９月18日（木）　沼津朝日新聞

沼津千本松原は、鎌倉時代の紀行文『東関紀行』に「千本松原といふ所あり。……」と紹介されており、古(いにしえ)から親しまれて来た松原です。

この美しい松原が、戦国時代の天文六年（一五三七）の頃、甲斐の武田・駿河の今川・伊豆の後北条の合戦の場となり、松は伐(き)られ荒れてしまいました。住民は、海からの強い潮風に作物が育たず、苦しんでいました。

荒廃したこの地に、一人の旅の僧がやって来ました。増誉上人長圓(ぞうよしょうにんちょうえん)です。海からの潮風の害を受けて困窮(こんきゅう)している住民を見た長圓は、塩害から人々を救うため、松原を元の姿に戻そうと思いました。この浜は荒い石の原で、潮風も強いため、松苗を植えることは容易ではなく、なかなか根付きません。長圓は、松苗を一本植えるごとに「阿弥陀経」を唱え、心を込めて松苗を植えつづけました。冷たい目で見ていた住民も、長圓のひたむきな行動に心を打たれて協力するようになり、一千本の松を植えました。現在の千本松原はこうしてできたと伝えられています。

クロマツ90本は伐採へ

千本松原への築山築造に伴い

千本松原に計画されている津波避難用築山（人工高台）の築造が、来年三月の完成を目指して進められている。白砂青松を誇る沼津のシンボルでもあるクロマツを伐採して造る海抜一五㍍の築山造成計画に対して要望書「千本松原を守って！」が栗原裕康市長や真野彰一議長らに提出され半月が過ぎた。市は要望者に対し、クロマツをなるべく切らずに済むよう設計変更を検討することを約束したが、提示された案は当初計画とそれほど変わっていない。

設計変更で救える松も

市「工事中止の考えない」

縦約六〇㍍、横約七〇㍍の予定地は海抜約六㍍で、ここに田子ノ浦港の浚渫（しゅんせつ）土砂にセメントを混ぜて高さ九㍍の円錐台（プリン型）に似た築山を築造する。予定地への津波による予想最大浸水高六・五㍍の場所に築山は海抜一五㍍。

クロマツ以外の樹木が取り除かれた築山予定地

築山の勾配は二㍍で一㍍上がる斜度約二六度。避難スペースを同面積として築山の高さを一五㍍から四㍍低くすれば、底面の長さを一六㍍短くでき＝**図の影の部分**＝、多くのクロマツを切らずに済む。

海抜一五㍍に固執するためか、市は設計変更の検討を約束したにもかかわらず、新たな図面はそれほどの変化はなく、伐採予定のクロマツ約百五十本のうち約九〇本が切られる。

さらなる設計変更ができないかについて、山中史隆危機管理課長は「地域住民に築山を建設すると約束し、業者と契約を結び工事も始まっている以上、中止するわけにはいかない」と見直す考えのないことを言明。

また、「図面だけでは、どのようなものが出来るか分からないので予定地で説明して欲しい、との住民要望があり、現場でクロマツ伐採も含め説明した」と意を尽くして進めていることを説明する。

六月二十六日の定例市長記者会見で発表された資料には、面積や海抜など築山の概要、特徴、整備スケジュールなどは記されているが、クロマツ伐採には一切触れていない。

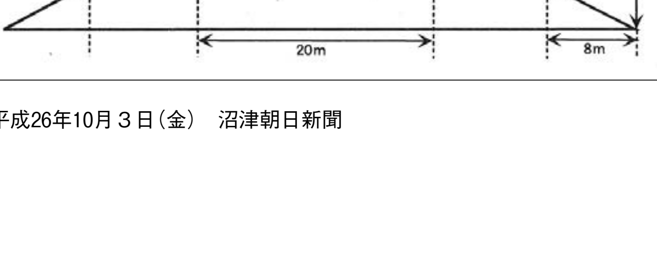
一方、松を切らないよう求めた要望者がコンサルタント会社の設計担当者に「沼津市がクロマツを切ってもいい、と言ったのか」と尋ねると、担当者は「それについては言えない」と言葉を濁したという。

一昨日、予定地を訪れるとツツジなどクロマツ以外の樹木は皆伐され、市立ときわ保育所と予定地を隔てる小道の生垣も取り壊され、防潮堤下に設けられたダンプカーによる土砂搬入路はアスファルト舗装を待つばかり。

要望者は「避難施設がないなら築山築造は理解できる。ときわ保育所ならびに中部浄化プラントが避難先として利用できるにもかかわらず、なぜ急ぐのか。これがまさしく不要不急の事業の典型ではないか」と憤る。

クロマツ伐採による築山築造ついて望月利通危機管理監は、「クロマツの命と人の命とどちらが大事ですか」と、先人が「松を切ったら腕を切る」と定めてまで守った千本松原のクロマツへの配慮は見えない。

人とクロマツ双方の命を守る算段はつかなかったのだろうか。



平成26年10月3日(金)　沼津朝日新聞

住民は長圓に感謝して、その徳をたたえて庵を贈りました。この庵が千本山乗運寺で、増誉上人長圓は開基です。

時は下って、大正九年（一九二〇）、歌人若山牧水は、沼津に移住して来ました。「一、二年の静養のつもり」であったのが、永住の気持に傾き、大正一四年には千本松原に隣接した土地を求め、住居を構えました。牧水は、千本松原を散策することを日課とするほど、この松原に惚れ込みました。ちょうどその時、静岡県による、千本松原の松の一部を伐採する計画が起こりました。

これを知った牧水は、「時事新報」や「沼津日日新聞」に、『沼津千本松原』と題する松の伐採に反対する檄文を投稿しました。反対運動は盛り上がり、この計画は中止されました。自然保護運動の「さきがけ」と言ってもよいでしょう。

その後、住民は、千本松原は「沼津の宝」だとして、植樹をするなど、大切に守って来ました。

昨年九月、沼津市がこの千本松原の一角に、松を伐採して、津波

沼津・津波避難「築山」建設

クロマツ90本伐採計画

千本松原の一角 一部住民反発

沼津市本に津波避難用の人工高台「築山」を建設する同市が、予定地にある千本松原のクロマツ約90本の伐採を計画している。3日の市議会地震・津波対策調査特別委員会で説明した。一部住民は「松を伐採せずに住民の命を守る方法はあるはず」と松を保存できるよう設計の見直しを要望している。

市によると、築山は海抜6㍍ほどに位置する市立ときわ保育所の隣接地に整備する。頂上の海抜約15㍍に約150平方㍍の避難場所を設ける。当初の計画では整備面積約4200平方㍍。9月から工事に入り、来年3月の完成を目指す。

市は住民からの要望を受け、伐採予定の松を約150本から約90本に減らした。特別委員会では整備予定地を視察した委員が「松を切らないことを前提とした設計変更はできないか」と質問したのに対して、市は防災面から計画を早期に進める姿勢を強調し、設計変更は難しいことを説明した。整備後にクロマツを新たに植える考えも示した。

千本松原をめぐっては大正期に持ち上がった伐採計画に対して、当時、沼津に住んでいた歌人若山牧水が反対運動を行い、中止させた歴史がある。戦国時代に伐採された松を住民と復元したとされる増誉上人が開いた乗運寺（同市本）の林茂樹住職は、「近くに津波避難施設があり、沼津の宝の千本松原を数十本も切って実施しなければならないほど緊急を要する事業なのか。伐採せずに松を移植するか、松に囲まれた築山にしてほしい」と市に要望する。今後は松の保護を目的に署名活動を展開する方針。

築山の整備予定地を視察する地震・津波対策調査特別委員会の委員ら＝3日午後、沼津市本

平成26年10月４日（土）　静岡新聞

避難用の「築山」を造成する計画であることを知りました。

千本松原にゆかりがあり、牧水の眠る乗運寺の住職として、沼津牧水会の理事長として、黙過することができず、「松の伐採に反対する」声を上げました。松を伐らずに済む津波避難の方途を考えるべきだと主張しつづけました。

多数の方たちの応援があり、報道各社も大きく取り上げてくださり、ついに、この三月、沼津市は松を伐採しないとの決断をしてくれました。百年以上の年輪を重ねて来た太い松を移植する計画だとのことです。移植したものの、枯れてしまったということのないことを希(こいねが)っております。

ここに、七ヶ月にわたる新聞報道の一部を掲載して、千本松原の松を守る運動の報告といたします。

ところで、牧水が大正一五年に、千本松原の松の伐採に反対する運動をした経緯を、「創作」社友・服部純雄氏が発表していることを、岡山在住の板津定邦様から教えてもらいました。その随筆「松」を掲載いたします。

（林　茂樹）

言いたいほうだい

千本松原を守りましょう

林　茂樹

沼津市は、市立ときわ保育所の子どもたちや住民の命を津波から守る津波避難施設として、千本松原の一画（ときわ保育所と中部浄化プラントの間）に、来年三月の完成予定で、「人工高台」を造成する工事に着手しようとしています。

計画では松を伐採し、田子の浦港の浚渫（しゅんせつ）土にセメントを混ぜて盛り土し、標高一五メートルの「築山」を造成するとのことです。

千本松原は、戦国時代に、戦乱によって伐採されたものの、増誉上人（乗運寺の開山）が住民と力を合わせて復元した松原だと伝えられております。また、大正十五年には、この千本松原の松を伐採しようとした県の計画に、歌人若山牧水は住民と共に反対する運動に立ち上がり、この計画は中止されました。

住民によって植えられ、幾世代もの人々によって守られてきた千本松原は、沼津市にとってかけがえのない大切な財産です。津波から住民の命を守るためとはいえ、住民が植え、育て、守ってきた千本松原の松を伐採せねばならないのでしょうか。松を伐採せずに住民の命を守る方法はあるはずです。皆で知恵を絞るべきだと思います。

そこで、沼津市当局に松を伐採せずに済む方策を求めてまいりましたが、太い松の移植には二年間の根回しが必要で、来春の「築山」完成に間に合わないので、一部を除き、二本立ちの太い立派な松をはじめ、数十本の松を伐採するとのことです。

静岡県第四次地震被害想定の沼津市「津波ハザードマップ」によれば想定津波高が五㍍であるのに対して、ときわ保育所前の防潮堤の高さは八㍍強です。

津波が防潮堤を越えることは想定されていません。

また、ときわ保育所の標高は約六㍍で、予想浸水深は沼津港側からの浸水による三〇㌢です。複合施設の保育所二階には標高一〇㍍の常盤町自治会館が併設され、ここが避難場所になり得ます。

それよりも沼津港の周辺地域の予想浸水深四㍍乃至（ないし）八㍍の住民の津波避難を考えることこそ緊急を要するはずですが、この対策は未定で、「築山」は、この地域の人たちのためのものではないということです。

この「築山」の造成が、沼津の宝・千本松原の松を数十本も伐採して行わなければならないほど緊急を要する事業でしょうか。松を移植するか、設計を変更すれば、松に囲まれた美しい「築山」が造成できるはずです。千本松原の松を伐採しないでください。

◇

十月三日、この要望書「千本松原を守りましょう！」を栗原裕康沼津市長に提出しました。

同日、沼津市議会地震・津波対策調査特別委員会が急遽開催され、傍聴しましたが、当局は、松の伐採を避けるための設計の変更も松の移植の意を示すこともありませんでした。

驚いたことに、地元常盤町に住む議員を除き、松を伐採して「築山」を造成するという説明を受けている議員がいなかったことが分かりました。

沼津市民の大半が、沼津の宝である千本松原の松が伐採されることを知らなかったはずです。

孔子の言葉を引きます。

「過ちては改むるに憚（はばか）ることなかれ　過ちて改めざる是を過ちという」（論語）

「千本松原を守りましょう！」の署名運動を始めました。皆さま、ぜひ賛同してください。

署名用紙は沼津市若山牧水記念館にあります。

（千本山乗運寺住職、沼津牧水会理事長）

平成26年10月７日（火）　沼津朝日新聞

千本松原 伐採見直しを

沼津・築山建設 住民が署名提出 市長「両立を検討」

栗原市長（右）に伐採見直しを求める林理事長（右から2人目）ら＝沼津市役所

沼津市が同市本に津波避難用の人工高台「築山」を建設するのに伴い、千本松原の松を伐採する計画を受け、伐採の見直しを求めている地元住民らが9日、市役所に栗原裕康市長を訪ね、賛同する1744人分の署名を提出した。市側は14日に予定していた松の伐採の延期を決め、栗原市長は「松と防災が両立できるよう検討したい」と述べた。訪れたのは、沼津ゆかりの歌人若山牧水をたたえる沼津牧水会の林茂樹理事長(76)ら5人。牧水は沼津に住み、当時持ち上がった松の伐採計画の反対運動を行った。林理事長は「移植をするか、松を生かした形で築山を造るか考えてほしい。お互いに知恵を絞ることが大切」と設計見直しを求めた。伐採撤回まで、署名活動を続けるという。

これに対して、栗原市長は東日本大震災を受け、近隣の園児らの生命を守ってほしいという要請から建設に至った経緯を説明した。その上で、「防災のシンボルとして建設を進めている。災害はいつ起こるか分からない。地元の意向を確認して対応を検討したい」と述べた。

市によると、築山は市立ときわ保育所の隣接地に建設する。整備面積は約4200平方メートルで、頂上は海抜約15メートルになる。9月から工事に入り、来年3月の完成を目指す。住民からの見直し要望を受け、当初予定していた伐採予定の松を約150本から約90本に減らすとしている。

平成26年10月10日（金）　静岡新聞

千本松原への思いそれぞれに

沼津牧水祭碑前祭・芝酒盛

沼津牧水祭碑前祭・芝酒盛が十九日、千本浜公園「幾山河」歌碑前で開かれた。牧水の遺徳を偲ぶ取り組みで、六十一回を数えるが、今年は特に、松原をめぐる問題がクローズアップされる中での開催だけに、大正十五年、県の松原伐採計画に異を唱えて立ち上がり、これを中止させた牧水への関係者の思いが従来にも増して注目される碑前祭となった。

主催者あいさつで、沼津牧水会理事長で牧水が眠る乗運寺の住職、林茂樹師は、概略、次のような思いを語った。

碑前祭で松原保存についての思いを語る林理事長＝千本浜公園内「幾山河」歌碑前で

秋の沼津の風物詩となっている碑前祭だが、今年は格別な思いで迎えている。

私は昭和五十一年に沼津牧水会の会長（後に社団法人となって理事長）になったが、前年の十月に先代であった父（乗運寺前住職の輝彦師）が亡くなり、葬儀を終えた翌日から次の会長になるよう求められた。任にあらずと断わったが、牧水は千本松原を守った恩人であり、乗運寺に眠っている、乗運寺の住職である限り、会長になってもらわなくてはならないと言われた。

献花の後、歌碑に日本酒をかける榎本館長

牧水は大正十五年、県の松原伐採計画に反対する運動に立ち上がり、その時、私の祖父（彦明師）も一緒に反対した。

私が会長を受けて三十九年。昭和二十九年に沼津牧水祭が始まり、四十九年からは芝酒盛も行うようになった。今では、沼津の文化を語り、発展を願う、楽しい集まりになった。

毎年、そのような思いで催してきて迎えた今年、九月四日、松原の中に築山が造られることが分かった。詳しく説明を聴くと、松を伐採するという。それを聴いて松の大切さを知らないのかと思った。百年、二百年たつ松が伐採される。設計したのは、きっと、そんな事情を知らない人に違いないと思った。

九月十六日は、八十八年前、牧水が福沢諭吉の時事新報に松の伐採に反対する文章を十四日からの三日間にわたって寄せた日の一日に当たるが、奇しくも、その日、私は「松を伐採しないでほしい」と市長宛てに最初のお願いをした。

十月に入って、伐採に反対する署名活動を始めたが、今、何千人かからの署名が寄せられている。人の命は、もちろん大事であって、それを守るためには、なんでもやらなくてはならないが、しかし、松を切らなくてもできるはず。

人の命を守ることは大切だが、自然を守ることも大切。議長をはじめ、市議の皆さんも真剣に考えてほしい。

沼津のまち、沼津の将来のために千本松原を守ってほしい。心を一にして、千本松原を愛した牧水を偲びながら、一献傾け、楽しい一時にすると同時に、沼津の発展に協力してほしい。

来賓祝辞に移ると、このあいさつに、栗原裕康市長は次のように応じた。

この問題（築山造成と、それに伴う松の伐採）は、防災と、自然環境をどう守るかということだと思う。今、（植物学者で）横浜国立大学名誉教授の宮脇昭先生に、沼津の森を、どう守り、育てていったらいいのか、教えていただいている。先生によれば、人が生まれる前に存在した木が、そこにあることが一番いいことだという。そういう森を守り、自然を守るようにしていきたい。

この問題については、宮脇先生にも来ていただき、防災面と、自然をどう守るのか聴き、すぐれて政策に沿って考えていきたい。

続いて、工藤達朗教育長が、自身が子どもの頃、松原や牧水歌碑の周りで遊んだことなどを話しながら、牧水祭にちなみ、中学生短歌コンクールが開催されていることを評価した。

この後、牧水の孫で沼津牧水記念館の館長を務める榎本篁子（えのもと・むらこ）さんが歌碑に献酒、献花。あいさつで、牧水が全国を歩き、各地の松原を知る中で、宮崎に生まれた牧水が、なぜ沼津に家を求めたかについて、富士山と千本松原を最も気に入ったからだとし、「全国に素晴らしい松原はあるが、この松原ほど素晴らしい所はないといい、子ども向けの童謡も作った。牧水が千本松原を愛し、保全に努力した、その沼津の松原を大切にしていきたい」と語った。

平成26年10月23日（木）　沼津朝日新聞

言いたいほうだい

増誉上人に聞け

出口　義規

沼津市当局が千本松原の黒松を伐採する計画を推進している―。

それを知ったのは本紙十月七日付の記事である。「常盤町住民らのための津波避難用築山（人工高台）造成に伴い、大量のクロマツが伐採される…」そうだ。

同日の「言いたいほうだい」欄で乗運寺住職の林茂樹氏が、千本松原が歴史的財産であることを述べ、黒松を伐採して築山を造成せずとも、避難場所は既存施設で確保できることを論じている。全くその通りだと私も思う。

千本松原を「ぬまづの宝一〇〇選」に選定したのは沼津市であろう。宝だから大事にしようと市民に呼びかけておいて、自らがその宝を壊そうとしている。何たる矛盾であろうか。千手観音が国宝であろうとも、指が五千本もあるのだから、その中の小指一本くらい折っても構わない―と言っているようなものではないか。

また、かつて千本松・沼津倶楽部が改築をするに際しては、市から「松は一本も切ってはならない」と指示されたという。それが、市の事業ならば切ってもいいことになるのだろうか。理屈の通らない話である。

この築山造成計画を審議・可決したのは市議会の地震・津波対策調査特別委員会であるが、その審議過程にも疑義がある。それは、八人の委員中七人が黒松の伐採を知らなかった、ということである。何らかの意図があって「伏せていた」と捉えるのが自然であろう。

ともあれ、審議の判断材料の重要部分を欠かしたということは、審議過程に瑕疵（かし）があったということに他ならない。それが明らかになったからには、いま一度、本会議を開催して委員会の議決を否決、若しくは審議のやり直しを命ずるべきであろう。議長は、毅然たる意志をもって議会の指揮を執ってもらいたい。

改めて言うまでもなく、千本松原は「日本百景」にも「日本の白砂青松一〇〇選」にも選ばれている名勝地である。「ぬまづの宝一〇〇選」に選定するのは至極当然と言っていい。

しかし、ぬまづの宝を施政方針にも取り込んでいる栗原裕康市長が、黒松伐採の件について全く関心を示していないようだ。どういうことであろう。

戦国時代にこの松原を復活させたと言われる、かの増誉上人が生きているならば、「この愚か者めが!」と、一喝するであろう。

（エッセイスト、西沢田）

平成26年11月６日(木)　沼津朝日新聞

沼津の松伐採

市長「強行突破はしない」

反対住職　専門家交え3者懇談

築山が計画されている松林で懇談する（左から）栗原裕康市長、宮脇昭名誉教授、林茂樹住職

津波避難の「築山」造成に伴う沼津市の松林伐採計画に対し、沼津牧水会理事長の林茂樹・乗運寺住職(76)らが伐採中止を求めている問題で、植生の専門家の宮脇昭・横浜国立大名誉教授が13日、千本松原最南端の現地を視察し、栗原裕康市長、林住職と3人で約1時間懇談した。懇談後、栗原市長は「計画を一部見直すが、松の一部伐採は避けて通れない」と述べた。

宮脇名誉教授は、土地本来の木を混植する「宮脇方式」と呼ばれる植樹で名高く、沼津市にも協力している。

築山にも当初から一部にタブやシイの「ぬまづの森」を作る予定だったが、栗原市長は築山の大半を占める芝生部分を減らし、森を増やすよう計画を練り直すとした。しかし、防災機能を生かすため高さ15㍍の築山の規模は変えず「費用的に問題があり、宮脇先生も新たに植えた方が早いとしている」として松の伐採方針は変わらないとした。ただし「政治的決断はするが強行突破はしない。完成が年度を超えてもやむを得ない」と約束した。

林住職は「15㍍の築山には疑問。宮脇先生は『仕方がない』と言うが、仕方がないとは今は思えない」と伐採反対の姿勢は変えなかった。その一方、「宮脇先生の千本松原の素晴らしさへの思いは同感できた。『皆で知恵を絞りましょう』という言葉も大変うれしかった」と共感もしていた。市は今後も林住職らと協議を続ける。

【石川宏】

平成26年11月14日（金）　毎日新聞 静岡版

牧水も愛した千本松原守れ

津波用築山造成で一部伐採計画

歌人の若山牧水(わかやまぼくすい)(一八八五～一九二八年)が愛した静岡県沼津市の景勝地「千本松原」で、津波避難用の山(築山)を造るため市がクロマツの一部を伐採する計画に、市民の反対運動が起きている。牧水も大正期、県の伐採計画に反対して松原を守った経緯がある。市は環境保全と防災対策が両立する道を探っている。(山下葉月)

千本松原は、沼津市から富士市まで駿河湾の海岸線十キロにわたるクロマツ中心の群生。沼津市内だけで十万本以上とされる。宮崎生まれの牧水が三十代で東京から沼津に移住したのも、富士山を望む景観に心が動いたためだ。

市は二年前、沼津港近くの松林を含む市有地約四千二百平方メートルで、近くの保育所園児らが津波から避難するため、マツを伐採して築山を造る計画を立てた。想定津波高が内港で七・四メートルに対し、築山は高さ十五メートルで、最大五百人を収容できる。今年九月に着工、クロマツ百五十本を伐採した上で、来年三月末の完成を目指していた。

これに対し、着工後に伐採計画を知った千本山乗運寺(せんぼんさんじょううんじ)の住職で、牧水を顕彰する沼津牧水会理事長の林茂樹さん(七七)は「美しいマツは住民が植え、幾世代もの人々が守ってきた。一本も伐採してはならない」と三度にわたり市に要望書を提出。一カ月で二千七百六十五人分の署名を集めた。乗運寺には牧水の墓もある。

> **若山牧水と沼津**
>
> 旅と酒好きで知られる牧水は1920年、富士山を望む千本松原の景観に魅了され、松原の一角に自宅を構えた。沼津市若山牧水記念館によると、松原の歌を100首以上詠んだ。静岡県は大正期の26年夏、松原の一部伐採を計画。牧水は9月16日付の日刊紙「時事新報」に寄稿し「此処(ここ)を伐(き)られてはもう、千本松原は日本一の松原ではなくなる」と論陣を張って反対運動を起こし、計画は中止された。

㊤駿河湾沿いに広がる千本松原。狩野川河口の沼津港(左上)からクロマツが約10キロ連なる=静岡県沼津市で、本社ヘリ「おおづる」から
㊦クロマツを視察する(左から)栗原裕康沼津市長、宮脇昭横浜国大名誉教授、林茂樹さん

沼津、市民らが反対運動

市は伐採本数を百五十本としていたが、要望を受けて築山の周辺部分は伐採せずに残すことで九十本に減らした。現在は工事も中断し、マツは一本も切っていないが、市の担当者は「災害への不安解消のために早く整備したい」と工事を進めたい考え。林さんはクロマツを伐採せず、近くに植え替える方法を提案する。

東日本大震災後に「森の防潮堤」構想を提唱した宮脇昭・横浜国大名誉教授(生態学)が今月十三日、市の招きで現場を訪れ、栗原裕康市長と林さんにアドバイスした。宮脇教授は「クロマツの植え替えは根付くか分からない」と、マツの苗木を植えることを提案。栗原市長は計画を一部見直す方針だが、伐採の前提は崩していない。

林さんは「築山を低くするなど、マツを切らなくても命を守る方法はある」と訴える。市は林さんや住民と議論を重ね、数カ月後に伐採本数や計画変更の結論を出す方針だ。

平成26年11月22日(土)　東京新聞(夕刊)

松は一本たりとも切らせない

築山問題で住民側が代替案　築造の根拠失われた

沼津港外港近くの千本松原に計画されている津波避難用人工高台（築山）。市立ときわ保育所隣への築山造成に伴うクロマツ伐採に反対している住民代表六人が二十六日、栗原裕康市長ら市担当者と話し合った。会談は非公開で行われ、終了後、住民側が記者会見した。

住民側は今月十二日、市長に築山の代替案を提出している。同保育所の図面を基に屋上の防水用に張られた厚さ六㌢のコンクリートを剥がし、FRP（繊維強化プラスチック）などの軽量素材に替えれば強度的に四百人の避難場所になるというもので、一級建築士が積算した。

一方、市も第二次見直し案を示し、築山の避難場所高度を前回の海抜一五㍍から一㍍下げ、その上に高さ一㍍の展望台を設け、クロマツ伐採を九十本（当初は百五十本を予定していた）から二十四本に減らし、造成後、クロマツ百二十本と照葉樹千二百四十本の苗木を植えるという。

住民代表で沼津牧水会理事長、松を植えた増誉上人が開山で県の伐採計画から松を守った若山牧水が眠る乗運寺の林茂樹住職は「結果的には第一次修正案を一部修正したに過ぎない。私が『孤高の松』と呼んでいる（樹齢百年以上の）松は切らないで、と要望しているが、予定では切るという」と不満を隠さない。

住民側が築山を一五㍍にする科学的根拠を求めたのに対して、市は、ときわ保育所屋上の海抜が一四・三㍍で、南側の中部浄化プラント屋上が一四・〇㍍なので、双方の高さを超えるものという考えのようだという。

沼津港の将来を考える有識者会議における「沼津港港湾振興ビジョン」作りに委員として参加した林住職は、「港から千本松原への連続性を要望し、県もそのように考えているにもかかわらず、市が伐採を中止しないのはおかしい」と指摘。

その上で、「松は一本たりとも切ってはいけない。築山の高さを一〇㍍にすれば一本も切らなくて済む。（私達は）松の命を絶ってはならないと要望当初から言っている。松は塩害、風害から住民を守ってきた」と松原の役割の重要性を強調する。

十月七日に始まった伐採反対署名は、特別に呼び掛けているわけでもないのに増え続け、二十六日現在、約四千筆に及び、同日の会談時に追加分の二千二百三十四筆が市長に提出された。

住民側が提出した代替案について市は「提案の内容には間違いはない」と認めているが、市長は「築山を造るのは政策的な問題。やるやらないは市長の権利だ」と語ったという。

住民側として出席した市の元教育長、長澤靖夫さんが「築山造成の目的は、保育所の子ども達の命を守るためだと市長は言っている。保育所の屋上が避難場所になれば築山を造る必要はないのではないか」としたのに対して市長は強く反論したという。

林住職は「要望が受け入れられるまで運動は続ける。座り込みも辞さない。築山を造る根拠は（代替案の内容を市側が認めたことで）既に失われている」と固い決意でいる。

会談の後、市から報道機関宛てに送られたファックスには「…命を守る緊急避難場所として、また、東日本大震災の教訓をいつまでも忘れないよう、防災上のモニュメントとしての意味を込めて築山を整備する」とあった。

園児や周辺住民らの避難用の築山が「防災上のモニュメント」と記念碑的扱いでは、実利的な考え方から形式的なものに様変わり。市側が当初指摘していた「防災のシンボル」というのも、海抜一五㍍にする必要性はなく、松原の予定地でなくてもいい。

ときわ保育所の屋上改修費は概算で五百万円、階段整備を加えても一千万円掛からないという。これに対して築山築造には約六千二百万円が予定され、造成に使う田子ノ浦の浚渫土の費用と運搬費は県が負担するというが、出所は税金。

平成26年12月28日（日）　沼津朝日新聞

築山建設 松伐採せず

沼津 反対住民の要望受け

沼津市は17日までに、同市本で進める津波避難用人工高台「築山」の建設に伴って千本松原の松を伐採する計画を見直し、原則一本も松を切らない方針を固めた。築山の裾野の形を変えて伐採を避けたり、松を築山の周囲に移植したりする方法を検討するという。

市は松の伐採に反対する沼津牧水会の林茂樹理事長らの要望を受けて2014年12月、伐採本数を約90本から24本に減らす計画を示した。これに対して、林理事長は「一本も切らない方法を考えるまで納得できない」と反発していた。

松の移植などに向けて建設現場を確認する関係者＝17日午後、沼津市本

17日には松の移植などに向けて、市担当者が造園業者や樹木医らと共に、建設現場で松の現状を確認した。市は今後も松の移植方法などについて林理事長らと協議を続ける考え。築山は15年度中の完成を目指す。

現場確認に同行した林理事長は「松を一本も切らない方針が確かであれば歓迎したい。今後は移植した松が枯れない方法をしっかりと考えてほしい」と話した。

平成27年３月18日（水）　静岡新聞

沼津市の千本松原 「根回し」に2～3年

来月にも築山仮工事へ

沼津市の景勝地・千本松原で津波避難用の人工の山（築山）を造成する計画で、市は二十七日、移植予定のクロマツの根の状態を樹木医とともに確認し、伐採に反対してきた住民に今後の手順を説明した。

市が三月に決めた計画によると、山の高さは十四㍍のまま、形を変更することで伐採をゼロにして、大三本と小六本の計九本を移植することにした。

移植するクロマツの根の状態を確認するため水をかける樹木医（左から３人目）＝沼津市で

磐田市で正木樹芸研究所を営む正木伸之さん(七二)らが、移植予定のクロマツ二本の根元の土を掘ると、絡み合う大小の根っこが現れた。正木さんは、樹齢百年以上として「片方は健康状態が悪い」と指摘。移植に向けた準備で細い根を生やす「根回し」に二～三年かかる上、根回しが終わっても「移植できるか分からない」と語った。

市の担当者は根回しにすぐに取り掛かる一方、根回し後に仮工事を始める手順を示した。早ければ四月末にも着手する。これに対し、伐採に反対してきた沼津牧水会理事長で住職の林茂樹さん(七七)は「移植できると分かってから工事を進めるべき」と話し、工事を急ぐべきでないと注文をつけた。

平成27年３月28日（土）　東京新聞　静岡版

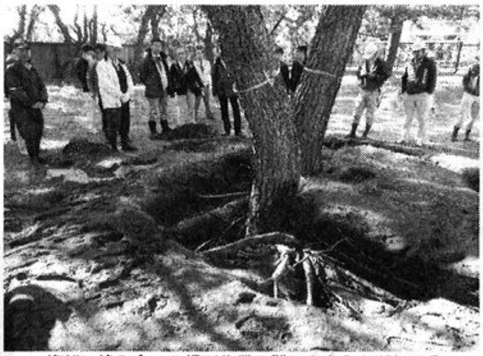
クロマツ移植で根の状況調査

千本松原への築山建設問題

市は、千本松原内の常盤町地先に計画している津波避難用人工高台、いわゆる築山建設で二十七日、市が移植を決めたクロマツの根の状況調査を樹木医の正木伸之さんに委嘱して行った。作業は、市内造園会社の五人が午前九時から取り組み、移植クロマツ二本の根元などを深さ五〇㌢ほど掘り、樹木を支える太い根、水分や養分を吸収する細根などの状況を確認した。

早期着工目指す市

根付くか懸念示す市民との間でズレ


複雑に絡み合った根が作業の難しさをうかがわせる

二本のクロマツは幹直径三六㌢と四六㌢で、正木さんによると、二本とも樹齢は百年を超えるという。クロマツは互いに一・五㍍程しか離れていないため、大小の根が複雑に絡み合っていることが分かった。

正木さんが移植のポイントとなる「根回し」について説明。現在、政治の世界などで事前交渉を意味する根回しだが、本来は、ある程度の年数を経過した樹木を移植する際に行う一連の作業だという。

根回し作業は、木が倒れないよう、太い根は切らずに砂を取り除いて幹周囲の細根を切り、再び砂を被せ、そこから新しい根と毛細根が出るのを待ち、移植可能かを判断するという。

クロマツは三月から六月にかけてと、九月から十一月にかけての年二回、根を出すという。根回し作業は二本のクロマツを取り囲む長径五、六㍍、短径四、五㍍の楕円内で行うことになる。

正木さんは絡み合う根を見て、二本を一度に根回ししなければならない難しさ、二本を一緒に移動しなければならない重量の大きさを指摘。作業を見守った市内の造園業者も正木さん同様の見解を示した。

一方、工事の再開時期を問われた山中史隆危機管理課長は、四月末から五月初旬に着手したい考えであることを示した。これに対してクロマツの伐採に反対してきた沼津牧水会の林茂樹理事長は、根回し後の発根状態も確認しないまま作業を始めようという市の姿勢を批判した。

工事再開後、市の計画によると、移植するクロマツの築山側に土嚢を築き、田子の浦港の浚渫(しゅんせつ)土砂にセメントを混ぜて築山を造るという。

現場に立ち会った井原三千雄副市長は「三月の(四回目の)修正案で松を切らないことで、(問題は)クリアできたものと考える。地震津波対策、地元の要望があり一刻も早く完成させたい」とする一方、「大きな三本の松を二年または三年掛けて移植したい。樹木医も慎重な考えを持って進める」としたが、牧水会会員は「見ての通り、移植は難しい。移植のために余分な金をかけず、ときわ保育所屋上を改修工事するか、または築山を低くすれば移植することもない」と、築山の高さの標高一五㍍にこだわる市の姿勢に辟易(へきえき)した様子。

今回の調査では、クロマツ特有の深根性の直根まで確認することはできず、また、根回し作業は地元業者にお願いしたいという正木さんの言葉が、作業の難しさを示唆。

伐採反対派は、移植しても根付かなければ伐採と同じだと懸念を強めているだけに、移植の決定は必ずしも解決とは言えず、一刻も早い工事再開を考える市当局とのズレの解消は難しそうだ。

林理事長は「『慎重に移植作業を進めたが移植は出来なかった』では済まされない。それにしても四月末の工事再開を表明するとは、余りにも乱暴な話。市民と市当局の千本松原への思いの差は何なんだろう」と嘆く。

平成27年３月29日（日）　沼津朝日新聞

築山建設へクロマツ移植

3本の根回し作業始まる

市危機管理課は十三日、常盤町地先の千本松原内に計画されている津波避難用人工高台、いわゆる「築山」建設の妨げになるクロマツ三本の移植作業に着手した。雨が降る中、市内の造園会社作業員が樹木医の正木伸之さん指導のもと、クロマツ周りの砂を掘るなど「根回し」作業を行った。

東椎路で造園業を営み沼津の森づくり実行委員会監事を務める羽切貞夫さんは、掘り出された細根が雨に濡れるのを見ながら「作業員は大変だが、クロマツの根にとっては雨の方が乾かなくていい」とプロの目。

作業が一段落したところで正木さんが、根回し作業について説明。本来、樹木の移植は休眠期の冬場が適しているため、木の活動が活発になる春を迎え、なるべく短期間で作業を終えたい、と二、三日での作業を示した。

沼津の森づくり助言者の宮脇昭・横浜国大名誉教授は、東日本大震災でクロマツの海岸林が津波でなぎ倒されたことから、クロマツと広葉樹の交じった海岸林整備を提唱しているが、「根を深く張らないクロマツは海岸林にふさわしくない」とする宮脇説に対して、正木さんは「地下水が低ければ（深層にあれば）深根性のクロマツの直根は深くなる。クロマツの根は深く張らない、というのは間違い」だと指摘。

掛川市では宮脇説を受け、昨年の六月と九月、二度にわたり海岸林に広葉樹を植樹したが、台風の潮風で枯れてしまったといい、「乾きと潮に強い樹種を選ばなければならない」と正木さん。

根回しの後は年末頃、クロマツの葉の色、成長具合を見て移植できるか否かを判断するといい、「一年で移植できるか、二年、三年かかるのか、根の回復具合の判断が重要」だとした。

本のクロマツ

白矢印が示す個所の直根の根回し作業

十四日に現場を訪れると移植するクロマツの枝を剪定し、木の安定を保つために放射状に張った多くの太根のうち、皮を部分的に剥いで新たな根

マツの真下に位置する直根部では、深さ約二㍍に掘られた穴の中で作業員三人が深さ約一・五㍍、直径二〇㌢程の部分の皮を約一五㌢剥がす根回し作業を行っていた。

作業を見守る羽切さんは「正木さんは二、三日と言っていたが、少なくとも今週一ぱいかかるのではないか」と皮を剥がす作業に時間がかかることを説明。皮を剥いだ後は根回し部分に木炭粉と客土、クロマツの生長に欠かせない菌根菌を混ぜて埋め戻す工程がある。

危機管理課によれば、

沼津朝日新聞

直線曲線

▽日本の松の緑を守る会が選定した「日本の白砂青松一〇〇選」の一つ千本松原は、戦国時代の戦で伐採されたクロマツを復活させるため千本山乗運寺の開祖、増誉上人が経を唱えながら苗木を一本一本植えたことで知られ、道徳の教科書にも採用されている。▽その後も、千本松原を愛する住民らの植樹や枝打ち、草刈り、蔓切りなどによって松原は維持されてきた。そんな住民らの一人として、近年では相澤大一郎さんの存在がある。しかし、相澤さんと一緒に植樹した、もう一人の男性を知る人は少ない。▽相澤さんは既に他界し、千本松原近くに生まれ育った一方の男性は八十六歳を迎えた現在、県がんセンターの緩和ケア病棟（ホスピス）に入院している。長年にわたり自然保護活動に携わってきた、この男性が「いよいよ追い詰められ

「業者に任せたから大丈夫」と枯死の心配はないとしたが、結果は木々の命を絶つことになった。これは厳然たる事実だが、市当局及び関係者の中で誰一人として責任を取ってはいない。▽今回の移植作業について井原三千雄副市長は「樹木医も慎重な考えを持って進める」と話すが、成功する保証にはならない。築山担当部署の最高責任者、望月利通危機管理監は、イーラde南側並木移植当時の緑地公園課課長補佐だった。今回の移植で想定通り根が出なかったら移植作業は諦めるという。▽一〇〇%の保証がなければ、最初から移植せずに築山の形状を変えれば済む話。移植の費用も数百万円は下らないだろう。市民の各種陳情に対し「予算がない」と断りながら、当初計画になかった移植を大枚はたいて実施しようというのだ。築山建設の意義は津波避難対策の「シンボル」から「モニュメント」に

沼津朝日新聞

言いたいほうだい

千本松原を守ろう

杉山　重義

千本常盤町地先の松原内に津波避難用の高台「築山」を造り、その妨げになる黒松を伐採するという市の計画に対して、沼津牧水会が松の伐採に反対を表明。理事長林茂樹氏の奮闘により、市当局の計画を変更させ、樹齢百年の黒松三本を移植することになった。

この間、林理事長は、沼津の由緒ある古寺の乗運寺住職として、さらには、かつて若山牧水の千本松原伐採を中止させた事例を挙げて、命運を賭けると言い切って来られた。

私も会員として会長と共に反対者の一人であるが、その経過で痛感したのは、市長、市当局者をはじめ、（市民もそうだが）千本松原に対する認識不足と、加えて市議会議員の無関心と無策ぶりである。

そこで、私の知る範囲の若山牧水の自然観と、千本松原と乗運寺の関わりについて多少述べさせていただく。

牧水が、県の千本松伐採計画に対して先頭に立って反対運動を起こし、中止させたのは大正十五年である。当時の社会情勢から見て画期的な出来事であり、牧水は単なる自然を詠う歌人ではなかった。

牧水は自然を自分自身として、愛し、悲しみ、苦しみ、それを旅に求めた歌人であった。それは、自然を損なうことを何よりも嫌い、許さぬ、今で言うエコロジーの先駆者と言うべき歌人であったからである。

次に、乗運寺と千本松原について述べよう。これは沼津市史に述べられており、下巻の「各寺院の沿革概要」によれば、乗運寺は、寺記によると京都知恩院の末寺として、天文年間に増誉長円上人がこの地に来て一寺を建て乗運教寺と名付けて開基となった。この時期既に千本松原はあったが、当時、今川と武田の争いで焼き払われていたため、付近住民は直接に潮風を受けて難渋していた。

長円上人は巡錫の途次、この有様を見て心を動かされ、松苗を一本一本、経文を唱えつつ植えて松原を復元して住民の苦難を救い、この地に永住した、とあり、以後、沼津城主になった水野家の菩提寺にもなり、沼津の古寺の一つに数えられて今日に至っている。

無論、伝説性に不明はあるが、林理事長は今、この歴史的古寺の住職であり、それを「松の伐採に頑強に反対しているのは一寺院の住職だけだ」などと見るのは、今日の場当たり市政の象徴とも言えるものだろう。

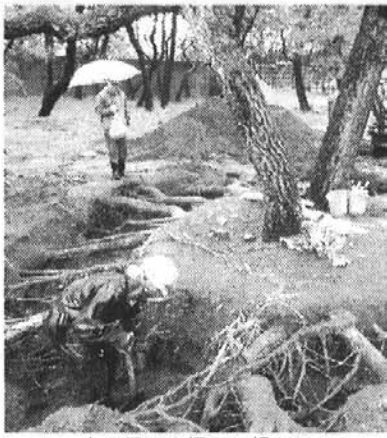
統一地方選挙は、間もなく後半の市議会議員選挙が始まるが、立候補予定者の政策に、沼津駅高架反対を言う候補は、片指を折る程でしかない。

ましてや千本浜の松を守ろうなどと言う候補は、私の知る限り二人であるが、今回の市側との折り合いを契機に、新たに千本松原を守る意義を市民の皆様に呼び掛け、沼津市を住み良くする牧水会として、入会運動や行事を展開したい。

方々のご協力改めてお願いする次第です。

（中沢田）

平成27年４月18日（土）　沼津朝日新聞



木の周りを掘られ根が現れた２

の出を待つ作業が行われていた。

手をつけてない二本の根が複雑に絡み合ったクロマツの根にも、根回し作業する目印としてビニールテープが各所に巻かれていたが、その数から時間と根気を要する作業であることをうかがわせた。

また、一本立ちのクロ

根回し作業終了後のゴールデンウイーク明けに移植予定の三本のクロマツを避けて本格的な土盛り作業に着手する予定だという。

平成27年４月15日（水）

ましたよ」と、自分のこの先を知り気をもんでいるのが、千本松原に計画されている津波避難用「築山」建設で移植される樹齢百年を超すクロマツの命。▽三十年以上前から市内の公園や愛鷹山、富士山などへの植樹を主導した、この男性は植物生態学を学ぶとともに、多くの経験から移植の難しさを指摘。幼木ならともかく、成木は生長した太い根を切らなければならない。それは、人間にたとえるなら手足をもぎ取られるようなものだという。▽千本浜公園駐車場拡張の際、移植された二十数本のクロマツは全滅し、イーラde建設時に移植された建設地南側並木のケヤキやタイサンボク、キンモクセイなど幹回り五六―一六〇㌢の十四本も、ほとんどが枯れてしまった。彼は、いずれも移植作業時から見つめてきただけに、築山のクロマツ移植による行く末を憂慮する。▽時の市緑地公園課担当者は

変わり、今では「展望施設」だという。そこに高さ一五㍍に固執する理由がありそうだ。▽長年にわたり千本松原を見守ってきた前出の男性は「海岸線を歩くと沼津より富士の方が枯れたクロマツが目立つ。千本松原を今後どのようにするのか、富士市民も交えて市民間で話し合ってほしい。百年を超えるクロマツの移植は無理だ」と、現状の千本松原を憂い、一昨日には医師から外出許可をもらい、市役所などを訪ねて回った。▽居ても立ってもいられない男性の思いが市当局に伝わることはあるのだろうか。誰よりも現場を知る男性の言葉は、当局関係者の上辺だけの言葉よりも、はるかに重い。「専門家に慎重を期して移植するようお願いしたが、残念ながら枯れてしまった。誠に申し訳ない」では、決して済まされない。市民の財産を枯らせたら、誰が責任を取るのか。〈滋〉

平成27年４月１日（水）

松

服部純雄

沼津市から原町に通ずる旧東海道を進み、市の西端を左折して、畦道伝いに一二町往くと、秀麗高雅な千本松原を背景とした桃畑の一軒家がある。そこが、若山牧水さんの住居なのだ。

　わたしの訪問したのは、丁度、木犀かおる秋の最中だった。わたしは、玄関から廊下づたいに牧水さんの書斎へと案内されたのであった。床の間には、雲開遠峰碧千畳、雨過落花紅半渓、という中村不折の一軸をかかげ、楣間には、『墨汁一滴』という正岡子規の原稿が横額となってかかげられてあった。小さな囲炉裡の鉄瓶からは、白い湯気がふつふつと立ちのぼっていた。わたしと牧水さんとは、この炉べりに端坐し、こころを開いて相対したことだった。

　西風が可なり強く吹き出してきた。千本松原に茂りあう、すくすくとした老松はゆらりゆらりと右に左に揺れながら、千万の松葉が、プラチナのヘアピンのように朝の光にかがやいていた。颯、さっ、ザーという松籟の音が書斎をつつんで、ホントにもの静かなことであった。

牧水さんは、例の温顔に平和な微笑をたたえて、とりとめもない雑談が、ソレからソレへと続けられた。ときどき、もろ手を炉ばたにかざしながら、つつましく語る牧水さんは、ホントに無邪気な童心を失わぬ人だった。

　そのうちに牧水さんが、ハッと、何かを思い出したように、わたしをみつめて、

ねぇ、服部さん、あなたは、松原の松の肌を剥ぎとって、一三〇とか、一五〇とかいうような、マークのしるしてあるのを御覧になりましたかね。

えゝ、きづきましたよ。一体、あれはなんですかね。

あれですか、あれはね、こんど、県当局が、あのうちそろった松林を伐り出して、お金に換えるという話なのですよ。なんと怖ろしい乱暴なことではありませんか。

ソレは大へんな事ですね——

先日も東京から、わたしの友人がやってきて、この話に憤慨して帰りましたが、今朝、コンナ歌を送ってきましたよ。

　富士が峰の尾への雪にひびきあひて
　　鳴りいづる松よ伐られんとする

牧水さんはしづかな声で朗吟してくれた。わたしは謂うたのである。

牧水さん。

ソレは小さな問題ではありません。コレはすばらしい巨きな社会問題ですよ。

ソレにつけて、わたしが、いま思い出すことがあります。

先年学習院の水泳部が、江ノ島から桃郷の松原へ移転するときのことでした。

当時の院長乃木将軍は、敷地見分の為に桃郷に往かれることになり、わたしも、当時の学生として随行することになったのです。将軍は、桃郷のすくすくと立つ雄渾な老松を仰ぎ見て、

　イヽ、気魄な松だ、

と、独語されましたよ。ソシテ、内匠寮の技師を招かれ、

　家屋はどんなに曲りくねってもよろしい。どうか、この松だけは伐らないで下さい、

と、叩頭されたことがありました。

わたしは、この老将軍の松に対する、あのもの静かな思いやりに涙ぐんだことがあります。

どうです。牧水さん、

コレは生温く袖手傍観している問題ではありません。毅然として反対すべき事柄だと思いますよ。仮令、ソレがふたりだけでも思いきった反対の第一声を、あげてみようでは、ありませんか、

と申したら、あの平和な牧水さんの顔が、みるみる赤く興奮し、昂然として、

やりましょう。

松のためにやりましょう。

と断言せられたことであった。

沼津の地方新聞に牧水さんの、『老松愛護』の一大論文が現れたのは、ソレからまもないことであった。

わたしも亦及ばず乍ら、『松樹礼讃』の一文を投じたのであった。

真理は生きる。反対は、次第に根強い生長を始めてきた。

沼津の西端から、トロトロと発火した一道の熱火は、遂に紅蓮の大火焔となり、沼津全市を焼きつくすまでになったのである。そして、とうとう、沼津国技館に於て、『千本松伐採反対市民大演説会』を開催するまでに生長した。

阿弥陀経とともに、千本松を植樹した増誉上人を開祖とする乗運寺の住職は、墨染の袖をまくしあげ、机を叩いて反対説を怒号した。

日ごろ、しずかな牧水さんも厳然として壇上に立ち、

なるほど、この見ごとな松の樹のことであるから、伐れば相当な金にはなるでしょう。

この美しく茂った雑木も、薪として役立つことでしょう。

然し、その金は新たにこれだけの松原を作るとしての費用の、何十分何百分の一に当るであろうか。

況んや、これを伐ってしまうのは、五日か十日で済むことでしょう。

しかし、これだけ仕立てるとしたら、果して何十年何百年のタイムを要して、しかも成就することであろうか、

噫々、悲しむべき風説よ。どうかただの風説として速やかに通りすぎてくれ。

痛ましい計画よ、どうか、夢みられた計画としてきよらかに流れ去ってくれ。

と悲痛な熱弁を振われたのであった。

そのあとで、地方の有力者達 ― 殊に平生政治に縁遠い純正無垢な人々が、続々として壇上に現われた、わたしもまた、その驥尾に附して起立したのであった。

ソレから、与論は堂々たる正論となり、遂に当局をうごかし全市民をうごかし最後に、われらは完全に勝利を獲得したのであった。

このときからわたしは、いよいよ深く、稜々たる松の気骨に就いて、畏敬を感じ、亭々たる老松の梢を仰いで、感慨にふけることをはじめたのであった。

（中　略）

わたしも、米国から帰朝のみぎり、全き同感を得たことがある。日本を代表するものは、桜でない。梅でない。柳でない。薔薇でない、況んや、その他の西洋草花でない。

亭々として千歳の操、色濃き常磐の松樹である。あの剛健な松である。あの謙譲な松であらねばならない。

万難不倒の大丈夫、詮方尽くるも尚希望に輝く老松の面影、それが日本を表象する松の雄姿であらねばならない。

○

こころみに諸君が、東京駅から神戸駅まで、車窓にうつりゆく麗しき自然のうごきを眺めて見給え。

到る処の大自然に眼睛一点の美を添えるものは、この青々した松樹である。

はらはらと立つ峯の松。とどろく浪の荒磯に張りわたす根あがりの松。畑中の一本松。老松稚松の片靡く大松原と小松原。時雨に濡

るる並木の松。真白い砂に立つ青いみだれ松。枯芝山の中腹にとびとびと立つ名なしの松。

　春夏秋冬に変りなく、旅人の寂しきこころをなぐさめるのは此の松である。

　わたしもいう。松は日本の代表である、と。

　わたしのM伯父が、廣重の『五十三次名所図会』と『六十余州名所図会』とを持っている。わたしは中学生時代から此の木版画に親しみ、この詩的な写生画から、どんな若きこころを躍らせたことであらうか。わたしは、この木版画を見るたびに、かの放浪の旅を思い、しずかな詩人のこころを思いやったのである。

　この八十一枚の木版画を観て、最も興味を惹くことは、どの画図にも、さまざまな松の姿を見うくることである。橋に近く、滝に近く、断崖の上に、谿のはざまに、渚に、島々に、巨きく、小さく、伸び伸びと空に向い、這うごとく地に蹲くまり、雨に煙り、風に靡き、晴にあかるく、雪に面白く、或は優麗に、或は豪宕に、或は寂然と、或は悠然と、遺憾なく廣重の天才を緑の松にあらわしていることだ。

　一立齋廣重は、松を礼讃しつつ日本の、自然のこころを識りつくした放浪画家として、永遠の生命を持つべきだ。

○

　わたしは嘗て、虹の松原をさまようた。千代の松原をさまようた。あの松原、この松原、曽遊の松原も可なりにある。しかし、なんと申すも、その親しさは千本松原が第一だ、長年を香貫山麓に住居した関係から、この松原は、わたしの親しい友だった。

　狩野川口から富士川口まで、緑のふちどる弓なりの大松原は、まこと清浄そのものだ。老松がすっきりして直立し、それが、何万本となくうちそろい、田子の浦、清見潟へと末遠くうちけむり、はるかに三保の松原に対する光景は雄大だ。

　紺青の海。白いまろ石の渚。深緑の松。その上に輝く富嶽八朶の霊容。それはなんという気高い大自然の壮美であるよ。

　わたしは、沼津から海を渡り、その対岸ともいうべき西浦から、毎日のように、この松原を仰ぎみた。そして、細々とした、ひと時雨が、このあたり一帯をうるおし、濛々として松の姿を掻き消してゆくのをみた。しかし、しぐれはすぐるに早く、松原のすき間を見する時雨かな　で、このうす墨色の景色は、またしだいにほぐれて翡翠いろの松影が、はっきりと白霧のうちからあらわれてくるのだ。

　嘗て、わたしはボストン市の美術館で、見飽きるほど、ミレーや、レンブラントを観賞したのち、トアル、一室にすすむと、ソコニは雪舟の大幅が、ひっそりとかかげてあった。唯一抹のうすずみ色、松原と春雨と唯一隻の苫船とが、神韻縹緲としてなんたる調和をみせていたことか。そのとき、『ああ、日本はよい国だ』と、わたしはつくづく思ったことがあった。

○

　わたしは、松の葉末からボタリと朝露の落ちるとき、この松原を漫歩した。砂はうっすらとうちしめり、ざぶり、ざぶりという漣の音もかすかに、そこらあたりは松の香気にみちていた。

　蝉時雨おさまりて、松樹の影うすれゆく松原のたそがれ、のこんの入陽にほのあかるき、ありさまは、なんというもの寂しさ、もの悲しさのきわみなるよ。

　黄ろい盆のような明月が、松の枝から登りくると、枝ぶり面白き松の林は黒々と、影を白砂に落してくる。そして、一本一本の松はあたかもわたしにもの言いかくるが如く、ゆらゆらと地上に墨染の影をうごかすのであった。

　ぬくとき沼津にめずらしい雪のあした、松という松は、白い練絹のようなかつぎをかけ

て、松葉の緑、いよいよ真青くなりまさる、オ、その葉いろの鮮しさ。

しかし、わたしの最もこのむのは、猛然と吹きだした大風の松原である。

沖には白龍踊り狂い、かもめは横ななめに吹きとばされ、唯一隻の帆影もなき大海原からドドドーと吹き出すとき、この大松原は、がっしりと大地に根を下し、老松は泰然として大海を睥睨し、烈風の猛撃に嘯ぶくのだ。オ、なんたる偉観！なんたる男らしき大丈夫の威厳なるぞ。

（中　略）

わたしは、三保の松原をあまりに名高きが故に、月並みとして侮蔑した。松は若いし、景色も平凡だ。と日ごろから考えていた。なんだか見ないさきから干菓子のような味がしていた、わたしが御穂神社のあたりから羽衣海岸を彷徨うて、果して、わたしの予感は事実であったと考えた。

ところが、そのかえるさ、三保から清水への艀の中で、丁度、中央よりやや右よりのところで、尾根をながながと渚に曳く真白妙の富士と、薩陲蒲原の山々と、紫紺の海と、その中にぐっと突き出した三保松原の緑の帯とが、ピッタリと一大調和をしめし、讃歎すべき絶景をあらわしたのを見て、全く冑をぬいで降参したことがあった。

（中　略）

思うに、松は、自然界のありとあらゆるもの背景となりて、不思議な、一大調和をあらわし、日本の自然界に生々とした一大美要素となっているのだ。

櫨の葉紅き晩秋初冬、はらはらと露時雨につつまれた箱根街道の松並木、国府津の宿、寝覚めがちなる仮寝の枕にひびく松籟の声、ほのぼのと朝霧のなかにあらわれてくる天橋の松、紫の海にばらまかれた瀬戸内の、島々をかざる赤松黒松、思えば、日本の山野到るところ、わたしの旅という旅のいたるところ、それはキット、有名無名の、濃緑浅緑の、老松稚松が幾千万本となく存在し、日本の自然と完全な調和を保ちつつ、秋津島根を永遠の緑りにつつみつつあるのだ。

○

日本を表徴するものは松の樹だ。
歳寒くして翠緑いやます松の樹だ。烈風に永劫の讃歌を奏する松の樹だ。日本の初春はまず門松よりしてそのめでたさを寿ぐのだ。
松は梅と竹との兄であるのだ。
松こそ、若き日本の代表だ。
清滝や波にちりこむ青松葉
俳人芭蕉の十七文字は、日本のそこ深さとそのきよらかさとを教えてくれる。
ああ、日本はよい国だ。

＊随筆集『雑草の花』（大日本雄弁会講談社、昭和四年二月三日刊）から転載。
＊常用漢字表に掲げられている漢字は新字体に改め、旧仮名づかいは現代仮名づかいに改めた。

服部純雄（明治二〇年八月～昭和二〇年六月）
服部綾雄（衆議院議員、沼津水野藩士服部純の長男）の長男。綾雄が嘗て校長であった岡山県立金川中学校に、若干二十八歳で乞われて校長となり、名校長として知られる。自由思想のもとに、育英活動にたずさわる一方、執筆活動を行う。牧水と家族ぐるみで交友。短歌、俳句、旅を愛す。乗運寺の檀徒。

千本浜海岸での地引網（大正12年）
左端が服部純雄、右から２人目が牧水

岡山・広島旅行記

北村正昭

岡山市の吉備路文学館で開催中（一月二十五日～四月十九日）の牧水生誕百三十年記念の「若山牧水展 ― 酒と友と旅を愛した、あくがれ行く歌人 ― 」に、沼津牧水会所蔵の牧水の酒を詠んだ短歌の半切や牧水歌集初版本、牧水の愛用した盃と徳利、牧水関連書籍等を貸出したことが縁で、林茂樹理事長に記念講演の依頼があり、「牧水と沼津」をテーマに講演する林理事長に、沼津牧水会会員の浅井治、長澤靖夫、原悦子、三宅芳則、北村正昭と事務局の大島葉子の六名が同行する旅となった。

二月七日（土）晴天。ＪＲ三島駅新幹線ホームに林理事長を含め七名が集合。富士山は裾野まで雪が積もり真っ白く爽快、我々の旅立ちを祝っているかのようだ。

新幹線「ひかり」の車内は、土曜日の割には乗客が疎らで、沼津牧水会の旅行の恒例となっている酒盛りを行うために、座席を向い合わせにして準備は整い、早速、浅井理事持参の銘酒を取り出して乾杯。それぞれが持ち寄つたツマミで、他の乗客に迷惑とならぬよう静かな宴会がはじまり、静岡駅を通過する時には、一本空になっていた。

神戸駅で「のぞみ」に乗り換え着席すると、タイミングよく、事前注文の名物駅弁「ひっぱりだこ飯」が配られ、岡山駅到着までの時間が少ないため急ぎ食べたが美味しく満腹になった。

吉備路文学館

岡山駅到着後、宿泊する駅前の東横インに荷物を預け、「吉備路文学館」へタクシーで直行した。

吉備路文学館では、遠藤堅三館長と奥富紀子学芸員の出迎えを受け応接室にて一休みとなった。同館は、鉄筋コンクリート二階建で広い内庭も整備された立派な文学館である。

講演は、募集定員百名の座席をオーバーする盛況で来館者の年齢は、やはり中高年が多く若い学生風の男女もいた。

遠藤館長による「牧水と岡山」と題する講演につづいて、林理事長の講演となった。

牧水の詠んだ有名な歌

「幾山河越えさりゆかば……」

「白鳥は哀しからず……」

「白玉の歯にしみとほる……」

の三首を紹介し、生い立ちや旅を愛し、自然を愛し、全国各地を訪ね、その土地を愛で、好きなお酒を飲みながら詠った歌を紹介し、「牧水」という雅号の由来についても、最愛の母マキの名を表す「牧」と尾鈴山に降る雨と坪谷川の渓流を表す「水」から取ったと自ら回想していると紹介した。

昭和三年、沼津千本松原の家で満四十三歳の若さで没したが、生涯に八千余首にも及ぶ短歌を残した。その間、大正末年に起こった

静岡県による千本松原の松の伐採計画に反対する運動に参画し、松の伐採計画を中止させたことを紹介して、牧水は自然保護運動の先駆けであるとたたえた。

没後翌年には、全国で最初の牧水歌碑として「幾山河こえさりゆかば……」が千本浜公園に建立され、昭和六年、千本松原にゆかりの深い千本山乗運寺に埋葬されたこと等々を紹介し、一時間余の熱弁は終わった。参加者の質疑も多く、岡山の人たちの牧水に対する関心の高さを感じた。

講演終了後は、林理事長と大島さんを会場に残して、別行動で日本三名園の一つ後楽園へ行き、公園内を散策。烏城(うじょう)(岡山城)を見物してホテルへ直行した。

夜はホテル近くの「飛鳥吉備亭」で夕食会を行い、「吉備路文学館」の遠藤館長と学芸員の奥富紀子さんが参加してくれ、牧水の話で盛り上がり、飲み放題のお酒を大量に空けた。二次会では、林理事長が列車内の飲み会は講演があるため控え目であった分、元気いっぱいで、隣の若いグループに入り込み賑やかに談笑していた。

二月八日(日)は倉敷市内観光のため、ホテルの朝食を七時から摂り、薄曇りで少し肌寒い中、岡山駅に着き、倉敷美観地区散策が身軽にできるよう、駅構内の大型ロッカーへ手荷物を置き、ＪＲ山陽本線にて倉敷駅へ向かった。

倉敷美観地区では、先ず林理事長ご希望の「倉敷民芸館」に入り、世界中の陶磁器、ガラス製品、籠など民芸品を観ることにした。ラッキーにも「李朝名品展」を開催中で日韓合併までの李氏朝鮮時代の無名の画工による庶民的な作品が多く展示されていた。

館内は、歩くとギシギシ音が出る古い作りの板廊下や階段を行き来し、各種名品を鑑賞した。ただし、書物で見たことのある「帰ってきた虎」は一月二十五日までの展示で観ることができず、残念！

次の「大原美術館」への道中では、錦鯉の泳ぐ倉敷川をゆったりと行き来する川船、近くに結婚式場があるのか文金高島田に結った花嫁と羽織袴の花婿が今橋(いまばし)で記念写真を撮っているなど風情溢れる光景もよかった。

中国系や台湾系の旅行者が大勢いて、どこの観光地でも日本人より多いのは、新しい現象なのか？

大原美術館では、グレコ「受胎告知」、モネ「睡蓮」、マティス「マティス嬢の肖像」、ゴーギャン「かぐわしき大地」、岸田劉生「童女舞姿」、藤島武二「耕到天」など大型絵画の実物を存分に鑑賞した後、商店街を散策しながら倉敷駅を目指した。

昼食は、予約してある駅近くの「白壁」へ入った。その店は地下一階にあり、中央には生簀(いけす)が設置してあり、色々な魚が泳いでいる雰囲気のよい店だった。奥の予約部屋へ案内され、昼定食の「瀬戸内海の魚料理」を肴に酒を飲みつつ美味しく食べた。

岡山駅に戻り、新幹線にて広島駅へ十三時五十五分に到着。タクシーに乗り換えた頃から風花が舞い始め、梅の花咲く広島城の外堀から、城をバックに記念写真を撮り、平和記念公園に向かう。

広　島　城

平和記念公園の原爆死没者慰霊碑

平和記念公園では、原爆死没者慰霊碑前で記念撮影を行う。就学旅行シーズンと異なり旅行者はほとんど見られなかった。

理事長は、公園内の松の木をしきりに観察、やっぱり松の植樹はよいと、沼津千本松原の伐採が気になると見え、何度も眺めていた。

平和記念公園の隣にある安芸宮島行の「ひろしま世界遺産航路」の桟橋では、待ち時間があるので、イタリアンレストラン「カフェ・ポンテ」で休憩した。

出航した船は、一旦元安川（もとやすがわ）を上流へ行き、太田川を下り安芸宮島へ向かった。四十五分の航行であったが、船底が川を航行する都合上平らな故か、波静かな割に振動が強く体に感じられた。

宿の「神饌（しんせん）の宿　みや離宮」は、宮島桟橋から厳島神社へ行く途中にあり、道を隔てて海が眺められる素敵な館だった。大風呂に入り旅の疲れを癒し、夕食会場へ行き、広島特産の牡蠣（かき）づくしの「牡蠣御膳」で宴会が始まった。

二月九日(月)晴天。宮島散策は、先ずは厳島神社。干潮で海水の無い回廊を歩き大鳥居をバックに写真撮影。次に、清盛神社から大願寺～宝物殿～多宝塔～龍髯（りゅうぜん）の松～豊国（ほうこく）神社「千畳閣（せんじょうかく）」。龍髯の松は、樹齢二百年以上のクロマツの枝を左右に約十五米伸ばし、龍の髯に見立て手入れをしてある立派な松だった。豊国神社は海や厳島神社を見渡せる高台にあり、豊臣秀吉が戦没将兵の慰霊のため

厳島神社の大鳥居

に建立したが、板壁も天井もない未完成の欅（けやき）造り。千畳閣と言われるだけあって壮大な建築物。豊国神社を降りた所にある「芝居茶寮水羽」という店へ昼食のため入る。

宮島観光の一つにロープウェーに乗り弥山（みせん）へ行く予定が、ロープウェーの緊急点検のため運行停止となって行けず、時間に余裕ができたこともあり、そこでも、あなご定食をつまみに宴会が始まり、酒の料金が観光地特有で高いとか、一合徳利に酒が六尺しか入っていないとか文句を言いながらも上機嫌となる。

帰りは、JR宮島口駅から広島駅で降り、それぞれが土産を買うため、一時解散した。新幹線「のぞみ」の車内でも広島駅で購入した酒とツマミでまたまた宴会を始め、新神戸駅で「ひかり」に乗り換えた際、駅弁「桃太郎の祭ずし」を配達してもらった。何時食べたのか美味しかったのかも記憶がない程、酔ってしまった。

今回の旅行では、全員無事に帰宅できたことはもとより、楽しい旅の想い出となったのは、お酒の飲めない長澤先生にすべてお任せで、事前の準備から交通手段、駅弁の手配、観光スポット、昼食、宿等の予約を含め、綿密なスケジュールによって完璧な旅行ができ、随所で感謝感激の連続だった。

第六十一回 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十九日(日)午前十一時

花柳寿宗師の「牧水を舞う」

爽やかな微風の吹く秋晴れの下、栗原裕康沼津市長、工藤達郎沼津市教育長、真野彰一沼津市議会議長をはじめとする沼津市議会議員のご臨席を賜り、東京牧水会、愛知牧水顕彰会及び土肥温泉牧水顕彰会の代表をはじめ、遠方からの多数のご参加をいただき、「沼津牧水祭・碑前祭」が開催されました。

林茂樹理事長は、開会の挨拶の中で、沼津市の計画した津波避難のための「築山（つきやま）」造成に伴う千本松原の松の伐採に反対する運動について報告し、牧水が千本松原の松を守ってきた歴史を紹介しながら、参加者への熱いメッセージと沼津市長をはじめ沼津市議会の関係者へのお願いを語られました。

来賓を代表しての栗原市長からのご祝辞の中で、林理事長のメッセージに応える形で防災と環境保護の両面からの検討を行うとの話がありました。工藤教育長の祝辞につづいて、榎本篁子館長の挨拶と「幾山河」の歌碑への献花、そして献酒が執り行われ、碑前祭は盛り上がりを見せていきました。

花柳寿宗師は「牧水を舞う」として、故大悟法利雄氏による、牧水の短歌と長詩の朗詠をバックに華麗な日本舞踊を披露されました。

引きつづき、「中学生短歌コンクール」の表彰が行われ、沼津市内十四校から応募のあった一六〇八首の中から、特選九首に選ばれた中学生がしっかりした態度で表彰されました。選者の一人である須永秀生副理事長は、解説の中で、中学生の瑞々しい感性の発露について語られました。

牧水「沼津を詠んだ歌」の髙田紹代（つぐよ）さんの独唱と「牧水のうた」を歌う会の合唱があり、蕭蕭（しゅくしゅく）たる松籟（しょうらい）を思わせる青木畝堂（ほどう）さんによる尺八の音は、高く低く強く弱く自在に操られ、会場を魅了しました。

榎本館長とご来賓の方々による鏡割りの後、真野沼津市議会議長の乾杯の音頭でいよいよ芝酒盛へと移っていきました。祭りは佳境に入り、オリジナル弁当と樽酒の振舞いは参加者を喜ばせ、地酒は馥郁（ふくいく）とした香りを広げ、燦々（さんさん）と降り注ぐ太陽は、参加された人々を木陰へと誘うほどでした。髙田さんの牧水「酒の歌」の独唱、ぬまづ観光ボランティアガイドの合唱、沼津ハーモニカクラブの合奏とつづき、渡邉総生（ふさお）さんの指揮・伴奏による「みんなで歌おう〝日本の歌・牧水の歌〟」では、牧水の短歌の朗読と参加者全員合唱となり、懐かしい歌が会場に広がっていきました。ほろ酔いの参加者の宴は、あちこちの花茣蓙（はなござ）の上に繰り広げられました。

最後を締めくくる「裾野五竜太鼓保存会」の大小十個を超える太鼓の演奏は、「やんや」の喝采の中で盛り上がり、体に響く太鼓の音は青空に突き抜けていきました。

余韻を残しながら、来年の再会を伝える金子安夫実行委員長の締めの挨拶で、「碑前祭・芝酒盛」は散会となりました。

（本会会員　東川勝範）

第61回沼津牧水祭
短歌大会

十月五日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
視聴覚ホール

第六十一回「沼津牧水祭短歌大会」は、大型台風の接近で、雨も降り出している中、講師に晋樹隆彦(しんじゅたかひこ)先生をお迎えして催された。晋樹先生は、平成二十五年、第四歌集『浸蝕』によって第十八回若山牧水賞を受賞されている。

午前の講演会で、宮崎での若山牧水賞授賞式の様子について述べ、受賞者は牧水について書く決まりがあり、牧水作品には「かなしい」「わびしい」「さびしい」の形容語が多いということについて書いたと語った。授賞式の翌日、伊藤一彦氏と二人で、中学校の体育館で牧水についてのトークショーを行った話などを、ゆっくりとユーモラスに話された。

本題に入り、「牧水最終歌集『黒松』のこと」と題して、牧水短歌を解説された。

大正十二年の「土肥温泉雑詠」の中での歌

　肌にややかなしきさびの見えそめぬ四人(よたり)子(ご)の母のはしきわが妻

　をとめ子のかなしき心持つ妻を四人子の母とおもふかなしさ

など、自分の妻を見る感覚に個性がある。明治四十一年の第一歌集『海の声』の出版から十五年経過して、「幾山河・・・」から感じるロマンとは大分作風が変わったと感じ、現代との時間の感覚の違いを感ずる。

大正十四年の「旅中即興の歌」の

　澄みとほるいで湯に浸りわが肌の錆びしをぞ恥づ独り浸りて

体の調子が段々よくないことを自覚してきた時に作った歌なのだろうか。

大正十五年には、弟子の大悟法利雄について歌っている。

　雨降れば出づることありてふ天城嶺の鹿を君見き梅雨の雨のなかに

大悟法利雄は、牧水の世話を何から何までしてきた人で、ある意味では妻以上に尽くしてきた人である。大悟法さんは酒を飲まない人なので、それがよかったかも知れない。

牧水は、感性というか、言葉の響きのようなものを先天的に持っている。文章を作る人は持って生まれた言葉の韻律の力を備えている。それは磨いてもなかなか出てこない。それでも磨きつづければ、ある時、力が出て来る。五首、十首とでき上がると他のテーマでも連携して生まれて来る。高齢化社会時代なので、九十歳になっても自分の納得のいく自信のある歌、人が感動する歌が作れます。むしろ七十、八十、九十歳からが勝負です。

午後の歌会で先生が選んだ三首を紹介する。

牧水賞一席　駿東郡清水町　高木絢子

　白昼ののうぜんかづら副葬のあまたの書籍燃ゆるほむらや

初句と二句でなんだかわからないけどスゴイ感じをパッと出していてよい。

牧水賞二席　千葉県流山市　葛岡昭男

　生きるとは食すことなり特養の食堂に集う友の明るさ

初句二句がストレートでよい。

牧水賞三席　広島県大竹市　赤瀬勝昭

　晩酌を少しおくらせスーパーの値引きを待ちて刺身買いくる

今のご時世の歌である。

とても充実した歌会で、参加者は大満足の一日であった。　（本会会員　近藤ゆみ子）

第27回 雛の歌会

三月一日（日）
午後一時三十分
沼津市若山牧水記念館ラウンジ

第二十七回「雛の歌会」は講師に「未来」選者の佐伯裕子先生をお迎えして開催された。

当日は雨天にもかかわらず、先生は東京都世田谷から早々と来沼され、四十三名の参加者があり、盛会であった。

先生は歌会に先立ち、学習院中等科時代に御用邸のある島郷の遊泳場で過ごされた思い出話を、なつかしげに披露され、当地への親近感を寄せられた。お祖父さまの土肥原賢二氏はA級戦犯として巣鴨プリズンで絞首台の露となられた。幼かった先生にとってその衝撃は大きく、のちに歌集『春の旋律』『未完の手紙』に「死と生」が色濃く詠まれている。

最新歌集『流れ』に至り、ようやく生粋の江戸っ子らしい語り口で過ぎ去った時をなつかしみ、変わりゆく東京の街への思いをいとおしみ深く詠われている。

当日は、「雛の歌会」にふさわしい清楚な装いで、出詠数七十五首について、ひとつひとつにやさしく寄り添われながら、歯切れのよい歌評をしてくださった。

出詠歌七十五首が歌に親しんで長い人たちの作品と見た上で、作品全体が「やや固めだろうか」と述べ、

草餅を乞う老姑（はは）がため下萌えのよもぎ摘みたる靄けぶる朝

「草餅を乞う老姑」より「母がため草餅作らむ」と端的に。

桃割れにぴらぴら簪揺らしつつ乙女さびたり七歳亜桃（あもも）

「ぴらぴら」のオノマトペが効いている。

坂道を激雨は流れ側溝へ人といふ字に傾（なだ）れ込みたり

「激雨」は「激しき雨」に。

また、「風の便り」「ほころんで」などの慣用語は避けたい、等々きめ細やかなアドバイスに納得の表情が最後まで会場に満ちていた。

佐伯先生が選ばれた作品十首を紹介する。

正月の来る人もなき玄関にかがり火花は紅く燃えいる　増井春江

展示室をうろうろゆけば閉ずるなきマルガリータの目に出会いたり　伊藤　純

農学部教授の案山子は田圃にて鴉と仲よく稲穂まもれり　矢島　智

ひだまりに女子会などとばばばかり甘酒をのむ熱海の梅園　後藤久枝

明治うまれの太宰治にわが父にありし修治の名をさびしめり　小山弘子

冬薔薇は白に限ると言ひし日のその微笑みを偲びて供ふ　長尾富雄

缶を開ける力失せたる親指が寂しげに吾の手のひらにある　須永秀生

力なく哀しきときは草をひく三十分と時間を決めて　河辺典代

しづかなる力とならん寒き膝椅子に揃へて座りゐること　原　悦子

子燕の巣立ちしのちもなつかしむ口口口（くちくちくち）の幼き日日を　一杉智子

ご多忙な先生は、翌日も朝戸出が早いからと、歌集のサインを終えられると、まもなく新幹線へ急がれてしまったのは残念であった。

（本会会員　青木朝子）

サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

古楽コンサートシリーズ30
「バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバと
チェンバロの演奏とお話」

日　時：平成26年５月18日(日)
午後６時45分
出　演：武澤秀平（バロック・チェロ、
ヴィオラ・ダ・ガンバ）
杉山佳代（チェンバロ）
来場者：113人

Liederabend mit Yuko SAITO &
Michiko TERAYAMA
(斉藤裕子と寺山みちこによる歌曲コンサート)

日　時：平成26年６月７日(土)
午後６時30分
出　演：斉藤裕子（メゾソプラノ）
寺山みちこ（ピアノ）
伊東杏子（ヴィオラ）
来場者：91人

叙情コンサート
ミュージカルソー・オムニQコードによる
神秘な音色で歌人の心を聴く

日　時：平成26年６月14日(土)
午後６時30分
出　演：瀧宰明
瀧ユリ子
来場者：53人

秋の夕に楽しむ能囃子コンサート
笛と小鼓の響き

日　時：平成26年９月６日(土)
午後６時30分
出　演：寺井宏明（笛）
久田舜一郎（小鼓）
来場者：80人

古楽コンサートシリーズ 31
「チェンバロの独奏、通奏低音、オブリガート
とお話」

日　時：平成26年11月 9 日(日)
　　　　午後 6 時45分
出　演：石和美和(フラウト・トラヴェルソ、
　　　　リコーダ)
　　　　杉山佳代(チェンバロ)
　　　　小林旬(お話)
来場者：106人

男声コーラス《夢鳴群》
「日本 心に残る、思い出の歌」

日　時：平成26年12月13日(土)
　　　　午後 6 時30分
出　演：夢鳴群（コーラス)
　　　　中川貴久美(ピアノ伴奏)
　　　　川島祐子(フルート)
来場者：87人

スティールパン＆ピアノ　新春コンサート

日　時：平成27年 1 月24日(土)
　　　　午後 6 時30分
出　演：伊澤陽一（スティールパン)
　　　　須藤信一郎（ピアノ)
来場者：84人

想い出のスクリーンが音楽で甦る映画音楽の世界

日　時：平成27年 2 月14日(土)
　　　　午後 6 時30分
出　演：山内達哉（ヴァイオリン)
　　　　須藤信一郎（ピアノ)
　　　　白佐武史（チェロ)
来場者：59人

カルテット プラチナム　弦楽四重奏

日　時：平成27年 3 月28日(土)
　　　　午後 6 時30分
出　演：沼田園子（ヴァイオリン)
　　　　野口千代光（ヴァイオリン)
　　　　大野かおる（ヴィオラ)
　　　　菊地知也（チェロ)
来場者：56人

文　化　講　座

初心者のための短歌講座

日 時　平成26年４月 ～ 平成27年３月
毎 月　第２土曜日　午前（全11回）
講 師　須　永　秀　生氏

牧水記念館短歌会

日 時　平成26年４月 ～ 平成27年３月
毎 月　第２土曜日　午後（全11回）
講 師　須　永　秀　生氏

牧水記念館俳句会

日　時　平成26年４月 ～ 平成27年３月　隔月第４日曜日　午後（全６回）
講　師　榎　本　好　宏氏

書　道　講　座

日　時　平成26年４月 ～ 平成27年３月　毎月第３火曜日　午後（全10回）
講　師　成　田　真　洞氏

平成26年度事業報告

総　会（第28回総会）　　　平成26年５月14日㈬ 午後６時～７時

理事会　第１回（通算143回）平成26年４月10日㈭ 午後６時～７時20分
　　　　第２回（通算144回）平成26年５月14日㈬ 午後６時～７時10分
　　　　第３回（通算145回）平成26年７月30日㈬ 午後６時～７時35分
　　　　第４回（通算146回）平成26年10月16日㈭ 午後６時～７時20分
　　　　第５回（通算147回）平成26年12月９日㈫ 午後６時～７時
　　　　第６回（通算148回）平成27年３月３日㈫ 午後６時～７時

会　報　第27号　　平成26年５月15日発行
館　報　第53号　　平成26年９月15日発行
　　　　第54号　　平成27年３月15日発行

１　調査研究事業

⑴　第15回「百草園牧水歌碑祭」へ参加（主催：東京牧水会）
　日　　時：平成26年８月24日(日)正 午
　会　　場：東京都日野市百草園　牧水歌碑前
　参 加 者：金子安夫、勝又十枝、野村章、原悦子、三宅芳則、山下数高

⑵　第64回 日向市の「牧水祭」へ祝電（主催：宮崎県日向市）
　日　　時：平成26年９月17日(水)午前９時30分
　会　　場：日向市東郷町坪谷　若山牧水生家裏牧水歌碑前及び牧水公園「ふるさとの家」

⑶　第58回 暮坂峠「牧水まつり」へ祝電（主催：牧水詩碑保存会）
　日　　時：平成26年10月20日(月)午前11時
　会　　場：群馬県吾妻郡中之条町　暮坂峠

⑷　吉備路文学館　特別企画展へ資料貸出
　（主催：公益財団法人吉備路文学館）
　日　　時：平成27年１月25日(日)～４月19日(日)
　会　　場：岡山市　吉備路文学館
　吉備路文学館　見学ツアー
　日　　時：平成27年２月７日(土)～２月９日(月)
　参 加 者：林茂樹、浅井治、長澤靖夫、北村正昭、原悦子、三宅芳則、大島葉子

⑸　第81回 延岡市の「牧水歌碑祭」へ祝電
　（主催：若山牧水延岡顕彰会）
　日　　時：平成27年３月22日(日)正午
　会　　場：延岡市 城山公園内 牧水歌碑広場

２　第61回 沼津牧水祭の運営

⑴　短歌大会
　日　　時：平成26年10月５日(日)午前10時30分～午後３時30分
　会　　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
　講　　師：晋樹隆彦氏
　　　　　（第18回若山牧水賞受賞者、「心の花」選歌委員）
　応募短歌：120首
　参 加 者：80人

⑵　碑前祭・芝酒盛
　日　　時：平成26年10月19日(日)午前11時～午後２時30分
　会　　場：千本浜公園　牧水歌碑前
　参 加 者：425人

３　文学講演会及び文学講座等の開催

⑴　第27回「雛の歌会」
　日　　時：平成27年３月１日(日) 午後１時30分～４時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　講　　師：佐 伯 裕 子 氏（「未来」選者）
　応募短歌：75首
　参 加 者：43人

⑵　初心者のための短歌講座
　日　　時：平成26年４月～平成27年３月
　　　　　　毎月第２土曜日 午前10時～12時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：須 永 秀 生 氏
　参 加 者：11回開催　延べ243人

⑶　牧水記念館短歌会
　日　　時：平成26年４月～平成27年３月
　　　　　　毎月第２土曜日 午後１時30分～３時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：須 永 秀 生 氏
　参 加 者：11回開催　延べ120人

⑷　牧水記念館俳句会
　日　　時：平成26年４月～平成27年３月
　　　　　　隔月第４日曜日　午後２時～４時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：榎 本 好 宏 氏
　参 加 者：６回開催　延べ 91人

⑸　書道講座
　日　　時：平成26年４月～平成27年３月
　　　　　　毎月第３火曜日　午後１時～３時
　会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　　師：成 田 真 洞 氏
　参 加 者：10回開催　延べ 89人

⑹　第25回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
　募集期間：平成26年５月10日(土)～９月10日(水)
　応募短歌：1,608首（14校　1,608人）
　入選短歌：52首
　選　　者：青木朝子、須永秀生、曽根耕一、高橋公子
　表　　彰：平成26年10月19日(日)「沼津牧水祭・碑前祭」にて

⑺　音楽イベント

第１回　古楽コンサートシリーズ 30 「バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロの演奏とお話」
　日　　時：平成26年５月18日(日)午後６時45分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：武澤秀平（バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ）、杉山佳代（チェンバロ）
　来 場 者：113人

第２回　Liederabend mit Yuko SAITO & Michiko TERAYAMA
　　　　（斉藤裕子と寺山みちこによる歌曲コンサート）
　日　　時：平成26年６月７日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：斉藤裕子（メゾソプラノ）、寺山みちこ（ピアノ）、伊東杏子（ヴィオラ）
　来 場 者：91人

第３回　叙情コンサート　ミュージカルソー・オムニQコードによる神秘な音色で歌人の心を聴く
　日　　時：平成26年６月14日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：瀧宰明・瀧ユリ子
　来 場 者：53人

第４回　秋の夕に楽しむ能囃子コンサート　笛と小鼓の響き
　日　　時：平成26年９月６日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：寺井宏明（笛）、久田舜一郎（小鼓）
　来 場 者：80人

第５回　古楽コンサートシリーズ 31
　　　　「チェンバロの独奏、通奏低音、オブリガートとお話」
　日　　時：平成26年11月９日(日)午後６時45分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：石和美和（フラウト・トラヴェルソ、リコーダ）、杉山佳代（チェンバロ）、小林旬（お話）
　来 場 者：106人

第６回　男声コーラス《夢鳴群》「日本 心に残る、思い出の歌」
　日　　時：平成26年12月13日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：梅原兼美、小澤隆、稀代幸雄、鈴木三郎、渡邊総生（夢鳴群）、中川貴久美（ピアノ伴奏）、川島祐子（フルート）
　来 場 者：87人

第７回　スティールパン＆ピアノ　新春コンサート
　日　　時：平成27年１月24日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：伊澤陽一（スティールパン）、須藤信一郎（ピアノ）
　来 場 者：84人

第８回　想い出のスクリーンが音楽で甦る映画音楽の世界
　日　　時：平成27年２月14日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：山内達哉（ヴァイオリン）、須藤信一郎（ピアノ）、白佐武史（チェロ）
　来 場 者：59人

第９回　カルテット プラチナム　弦楽四重奏
　日　　時：平成27年３月28日(土)午後６時30分
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　　演：沼田園子、野口千代光（ヴァイオリン）、大野かおる（ヴィオラ）、菊地知也（チェロ）
　来 場 者：56人

４　企画展示

⑴　平成26年度「書道講座」受講者作品展示
　期　　日：平成27年３月17日(火)～３月29日(日)
　会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　入 場 者：377人

５　その他の事業

⑴　協賛事業
　第85期　将棋「棋聖戦」第３局　羽生善治棋聖 対 森内俊之竜王
　（主催：産経新聞社、日本将棋連盟、日本将棋連盟沼津支部、第85期 将棋「棋聖戦」第３局開催実行委員会）
　（後援：沼津市、沼津市教育委員会、一般社団法人沼津倶楽部、プロジェクトＮ、本会）
　対　　局：平成26年７月５日(土)午前９時　沼津倶楽部
　前 夜 祭：平成26年７月４日(金)午後６時　沼津リバーサイドホテル
　こども将棋大会：平成26年６月29日(日)午前10時
　シニア将棋大会：平成26年６月29日(日)午前10時
　指導将棋会：平成26年７月５日(土)午前10時
　大盤解説会：平成26年７月５日(土)午後２時
　　会場は、いずれも沼津市若山牧水記念館
　参加者数：前夜祭311人、こども将棋 52人、シニア将棋 66人、指導将棋会 37人、大盤解説会 211人

　久元祐子ピアノフォルテコンサート
　（主催：一般社団法人沼津倶楽部）
　日　　時：平成26年９月28日(土)午後５時
　会　　場：沼津倶楽部ロビー
　来 場 者：41人

公益社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、公益社団法人沼津牧水会と称する。
第二条　この法人は、主たる事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。
第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短詩型文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
第四条　この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
(1)歌人若山牧水に関する調査研究
(2)沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3)文学講演会、文学講座等の開催
(4)文学に関する各種出版物の刊行
(5)沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6)その他この法人の目的を達成するために必要な事業
第五条　この法人に次の会員を置く。
(1)正　会　員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は団体
(2)賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は団体
(3)名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、会員総会の決議をもって推薦されたもの
2　前項の会員をもって、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の社員とする。
第六条　この法人の会員になろうとするものは、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続を要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
第七条　この法人の事業活動に経常的に生じる費用に充てるため、会員になった時及び毎年、会員は、会員総会において別に定める額を支払う義務を負う。

公益社団法人沼津牧水会入会金及び会費規程

第一条　この規程は、公益社団法人沼津牧水会定款第七条に基づき、入会金及び会費について定めることを目的とする。
第二条　定款第七条第一項に規定する入会金は、次のとおりとする。
(1)正　会　員　一〇、〇〇〇円
(2)賛助会員　三〇、〇〇〇円以上
第三条　定款第七条第一項に規定する会費は、次のとおりとする。
(1)正　会　員　五、〇〇〇円（年額）
(2)賛助会員　一〇、〇〇〇円以上（年額）

〈理　事　長〉林　茂樹
〈副理事長〉杉山　光男　須永　英男
〈理　　事〉浅井　治　保坂　輝夫　田中　和男　金子　安夫　四方　一瀰
八十濱俊一　長澤　靖夫　青木　朝子　河辺龍二郎　高橋　公子
〈監　　事〉杉山　重義　鈴木　弘行
〈事　務　局〉大島　葉子　伊藤早智子　近藤美智代　納谷　瑞穂

編集後記

平成二十六年九月、千本松原の松を伐採して津波避難用の「築山」を造成する計画を知りました。千本松原は若山牧水が守り、沼津市民が大切に守ってきた松原です。千本松原の松を守った牧水を顕彰することを目的の一つとする「沼津牧水会」は、理事会へ諮り、松の伐採に反対することを全会一致で決議しました。防災と環境の共存について考える年ともなりました。できることを精一杯やり、沼津の宝である「千本松原」を守り抜きたいと思います。

巻頭に、榎本篁子館長の「牧水と千本松原」を載せさせていただき、この半年間の新聞報道を掲載して振り返り、牧水と交友のあった服部純雄氏の随筆「松」を掲載させてもらいました。

本会所蔵の資料の貸出をしておりました吉備路文学館の「若山牧水展」に本会から七名が見学に行ってきました。その紀行文を北村正昭会員に寄せていただきました。

「沼津牧水祭　短歌大会」には晋樹隆彦先生を、「雛の歌会」には佐伯裕子先生を講師としてお迎えし、共に充実した歌会を催すことができました。

「沼津牧水祭　碑前祭・芝酒盛」は、好天に恵まれ、盛大に開催することができました。

「短歌講座」「短歌会」「俳句会」「書道講座」の各講座も好評で、「サロンコンサート」を九回開催しました。記念館への年間入場者も増えてくれました。うれしいことです。

将棋「棋聖戦」第三局が沼津倶楽部で開催され、本会も後援し、大盤解説会などが牧水記念館で実施されました。前夜祭も賑やかに開かれて、大勢の参加者がありました。本年も、七月四日(土)に沼津倶楽部で対局があり、前夜祭も催されます。ぜひご参加ください。

本年度も種々の事業を実施いたします。変わらぬご支援をお願い申し上げます。

■会報「幾山河」第28号 ■平成27年５月15日発行 ■編集・発行 公益社団法人沼津牧水会 ■〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11
TEL・FAX〈055〉962-0424　E-mail：bokusui@thn.ne.jp　URL：http://web.thn.jp/bokusui/　■印刷 ㈱耕文社